
姉は僕にキスをする。

竹野けた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉は僕にキスをする。

【Nコード】

N3197Z

【作者名】

竹野けた

【あらすじ】

「私の初恋の相手は実の弟よ」
主人公”相崎優太”は、ある日突然キスをした。しかしその相手は主人公の実の姉だった！？
弟を振り向かせるため奮闘する姉、姉の誘惑に抵抗する弟のブラコンラブコメディー！

この作品には作者の強い願望が一部含まれております。その為、過激な性的描写がある恐れがございます。警告タグをご確認し、苦手な方は無理にお読みにならないことをお勧め致します。

じゃあなぜ。

なあに、理由は簡単。夢だ。

どういうわけか最近、変な夢をほぼ毎日見る。

夢の中の俺がなぜか謎の少女に告白されたり、キスを求められたり、さらに言々と男女の……アレまでも求めてくるのだ。

これって良い夢として捉えていいのだろうか。

夢の内容を考えた感じでは、俺はほぼ毎日素敵な夢を見ている幸せ者かもしれない。

でも、少し気にかかる点もいくつかある。

一つ目はその謎の少女の顔がわからないこと。あと一步で顔が見える！ というところでもいつも目が覚めてしまう。

そして二つ目、それは謎の少女の声が日を重ねるごとに声が歪んで聞こえるのだ。初めてこの夢を見た時ははっきりと透き通るように、夢の中の俺へと届いていた。

しかし、その夢を見始めて約一週間。なぜかその謎の少女の声は、まるでトンネルの中で叫んだかのように歪んで聞こえるのだ。

……これは一体何を意味しているんだろうか。

軽い頭痛を頭に抱えながら、俺
相崎 優太は布団から
体を起こした。

季節は春、でも夏になりそうといった何とも言えない微妙な時期。それでも俺は冬の寒さ、夏の蒸し暑さを感じることなく、清々（すがすが）しい朝を迎えた。

「あつ、優太。おはよ」

「……おはよー姉さん」

寝かしていた体を起こし、まだ微かにぼやける視界を目で擦っていると、台所の方から聞きなれた声が聞こえてきた。

俺のひとつ上の姉、相崎^{あいさき} 亜衣^{あい}だ。

今俺は高校二年生だから、つまり姉の亜衣^{あい}は高校三年生ということになる。おまけに学校は同じ学校に通っている。

「ほら、朝ご飯できてるから、さっさと食べて」

「……はいはい」

俺は机の上に置かれた食パンにバター塗り、そのままかぶりつく。自慢して言えるものではないが、我が家は俺と姉の二人暮らしをしている。

理由は父親の海外への単身赴任だ。

父親の単身赴任が決まった時、父親は「大丈夫、安心して待っていてくれ!」と、自信満々に言っていたが、それを聞いた母親は「キャベツとレタスの見分けすらつかない人を一人にできないわよ」とそのまま父親について行ってしまったのだ。

息子^{おれたち}達を残して。

ちなみに我が相崎家は五人家族だ。父親に母親、俺に姉の亜衣、そして妹もいる少し騒がしい家族なのだが、父親と母親が海外へ行くと決まった時、「あたしも行く!」とそのまま妹も海外へ旅立ってしまった。

両親は息子達を残して海外へ行くこととするわ、妹は海外へ行きたいという理由だけで海外へ留学? するわでもう、我が家はある意味崩壊してるのである。

それでも一応、月に一回両親から生活費は貰っているのだけど。そして今現在、俺と亜衣は面倒な役目を負わされている。

思い出すだけでため息が出るから、機会があるまで忘れていよう

……。

「優太ー、そろそろ学校行くわよ」

「あー先行つてて。ちよつと便所」

「はあ……。待ってあげるから早くしなさい」

「いや、待たなくてもいいのに」

朝食をとり終わった俺は、トイレで用を足し、玄関で待っていた亜衣と渋々一緒に登校した。

学校が終わり放課後、俺は夕食の準備も兼ねてスーパーに来ていた。

俺と亜衣は家事をそれぞれ役割を決めて生活している。

例えば朝食、朝食は先に起きた人が準備するという決まりになっている。

他にも洗濯、アイロンがけは常に亜衣、学校の昼食の弁当、夕食、食器洗いは常に俺と役割を決めているのだ。

ちなみに役割の決め方はじゃんけんで、俺は見事に全敗し、飯を作るという面倒な役割になったというわけだ。

「今日は野菜炒めでいいか」

スーパーで買い物を終え、俺は買い物袋を片手に自分の家へと向かう。

しばらく歩くと、いつもの見覚えのある赤い屋根のアパートが目に入ってきた。

これが俺と亜衣が生活している場所だ。

台所に押入れ、お風呂もあり、小さめのベランダもある。二人暮らしには何一つ不自由の無い環境だ。

カツカツと二階建てのアパートの階段を上がっていく。

「ただいまー」

「おかえり優太、さっさとご飯作りなさい」

「帰ってきたばっかの奴にそんなこと言うなよ」

「いいじゃない。ご飯担当は優太なんだから」

「……はあ」

俺はため息をつきながらもスーパーで買った食材やらを冷蔵庫へと入れていく。

あつ、牛乳買うの忘れた。

「ねえ優太。今日の夕食は何？ 私うどんが食べたいわ」

「野菜炒め」

「チッ」

「舌打ちすんな！」

なんでこの姉はこうも上から目線なんだ。まあいつものことだけ
ど。

「ホントに野菜炒めなの？ 一昨日食べたわよ」

「毎日毎日メニュー変えられるほどの調理技術があると思うな」

「……使えないわねえ」

「あああああああもう！ わかったよ、うどん作ればいいんだろ、うどん作れば！」

俺は半ば^{なか}イライラしつつも、夕食のメニューを「野菜炒め」から「うどん」へと変更した。

亜衣に刃向うとロクなことが起きない。

前に我が姉がリクエストしてきた弁当のメニューを、俺はすっかり忘れており、唐揚げを入れると言われていたにも関わらず、間違えてもやし炒めを入れてしまった時はヤバかった。

俺の上に馬乗りされて百回謝るまで許してくれなかった。……今でも忘れられない。

「ふふつ、やっぱり優太は優しいわねー」

……反抗したら何されるかわかったもんじゃないからなあ。

「ねえ優太。私」

「何？」

俺がそう聞き返したとき、亜衣は俺の後ろに立ち、後ろから抱きついてきた。

「ちよつ、くつつくなよ」

「私、優太のことが好きなのよ？」

「はっ！？ 何をバカなことを言っ」

俺が言おうと思ったことを口に出し切る前に、俺の唇は亜衣の唇と重なり、ふさがれた。

「私は……本気よ。だって、初恋の相手は優太だもん」

亜衣はそう言って再び俺にキスをした。

第2話 知らない 知ってる

住宅街に佇むとあるアパートの一室。

部屋はうどんをすすする音しかなく、会話もせず、ただただ目の前にある夕食を食べることだけに集中していた。

「……………」

実の姉にキスされた。

突然亜衣にキスされた瞬間を、俺はバカみたいに頭の中で何度も何度もリピート再生していた。

あれはただのイタズラのはずだ。あれは何かの間違いだ。心の中で必死にそう叫んでも、どうしても亜衣のあの一言で心の叫びがかすれていく。

私は本気。

あれの言葉を俺はどう受け止めればいいんだろうか。ちらつと目の前で俺同様夕食で作ったうどんを完食することに集中している亜衣に目を傾けてみる。

キスしてきた当の本人は、あれから一言もしゃべらなくなってしまうった。

顔を真っ赤にし、自分のやった行動を悔いるように顔を俯かせるばかりだった。

ふと俺の視線に気づいたのか、亜衣が恐る恐る顔を上げる。

「……………」

目があった途端、まるで残像でも見えるんじゃないかというほどの速さで視線を外される。

正直、気まずいのは俺も同じなのだが。

「ね、姉さん？」

「……ひっ」

このままだと駄目な気がした俺は、少し声のボリュームを下げ、ゆっくりと亜衣を呼んでみる。

しかし亜衣の反応は、まるで今にも狼に食べられそうな羊のように、俺に怯えるように体を縮こませた。

「なっとなな、なななな……何？」

亜衣は俺の言葉に、持っている箸をぶるぶるを震わせながら口を開いた。

「いや……その、このまま気まずいのは……嫌だから、その」

先に口を開いたにも関わらず、肝心な時に限ってまともな言葉が頭に思い浮かばない俺は、とりあえず少しでも”あの出来事”を忘れるため、何か明るい話に話題を持っていくことにした。

今は会話の内容よりも、少しでも長く亜衣と会話し、ぎくしゃくした関係を修復しなければならぬ。

「あ、明日の弁当……。何か入れて欲しいものはある？」

「……卵焼き」

「そっか、わかった」

「……」

俺が予想していたよりも早く、迅速に話が終わってしまった。

まだある、まだ探せば話すことが無限と見つかつてくるはずだ。

「……母さん達、いつ帰ってくるんだろうな」
「知らない」

「……俺、明日体育で持久走があるんだよねー」
「知ってる」

「……そういえば来月は体育祭だったっけ。い、いつから？」
「知らない」

「……そ、そうだ！ 来週からコンビニでメガ肉まんが発売され
」
「知ってる」

……………。

どういいうわけか額から嫌な汗をかく。
もう薄々気づいている。何を口にしても「知ってる」「知らない」
しか返事が返ってこないのかもしれないと。

それでも俺は頭をフル回転させ、これでもかというほどの話題を
絞り出す。

「ねえ、優太^{ゆうた}」

「な、何でしょうか……………？」

さっきまで顔を真っ赤にして俯いていた亜衣は、ついに顔を上げ、
今度を自分から口を開いた。

……顔はまだリンゴのように、いや、それ以上に赤いのだが。

「その……………さっきのき、キス……………のことなんだけど」

そう亜衣が口にした瞬間、俺は自分でもわかるくらい顔が赤くな
った。

「あ、あれはね。……本気って言ったけど、あの……姉弟、そう姉弟！ 姉弟として本気で好きってこと」

「……へ？」

「……だ、だから！ 家族の中では一番優太が好きってことよ。そうよ、家族よ家族」

「そ、そっか」

いまいち亜衣の言葉を理解していない俺は、ぼーっと一人で理解し納得してしまった亜衣を見つめることしかできなかった。

気まずい雰囲気は何とか無くなり、またいつも通りの関係に戻った。しかし、俺はなぜ亜衣がいつもの亜衣に戻ったのか未だにわからない。俺と亜衣は、夕食を済ませ、各々（おのおの）自由に過ごしていた。

とは言っても、住んでいる場所が住んでいる場所でもあり、マンションや一軒家と違い俺達はそれぞれ自分の部屋が無い。ある個室をいったらトイレ、風呂ぐらいしかない。他はベランダや押入れだけだ。

そのため今、俺は食後の食器洗い。亜衣は和室。和室といっても部屋に和室しかないのは言わないことしよう。で学校で渡された課題をしていた。

「はい。いらなら置いといていいから」

食器洗いを済ませた俺は、スーパーで見つけて無性に食べたくなって思わず買ったさくらんぼを小さな小皿に入れ、亜衣がすらすら

と課題をやっているローテーブルの隅の方へ置いた。

「ありがと。もらうわね」

俺にお礼を告げ、亜衣はいくつか皿に放り込まれているさくらんぼに手を付けた。それに釣られるように俺もさくらんぼを一つ手に取り、口の中へとくわえ込んだ。

久しぶりに食べたせいかわ、甘酸っぱい味が癖になり、また違うさくらんぼを手に取り、口にする。

「っ!？」

「? ……どうかした？」

「い、いや。別に……」

意味もなく慌てて口に入れてしまったせいかわ、種ごと飲み込んでしまった……。

一人空しく鬱になっていると、姉は口をもごもご動かしながらこちらを向いて言った。

「ちょっと見て見て」

「何?」

俺が憂鬱になっていることも知らず、亜衣はぺろっと舌を出した。

「ほら、すごいでしょ」

亜衣の舌を見ると、そこにはさくらんぼの枝が見事に結ばれていた。

「ふふん、練習したのよ」

「姉さんって無駄なことを無駄に練習するよね。確かペン回しも一時練習してなかったか？」

「良いじゃない別に。もしかしたらコレを使う日が来るかもしれないじゃない」

「それっていつだよ。さくらんぼの枝を誰が一番早く結べるかって大会があるなら別だけど」

「使う日……ねえ」

俺は呆れつつもテレビの電源を入れた。

亜衣の学校の課題も終わったらしいし。

すると「そうだ！」と言わんばかりに俺の隣に亜衣が滑り込んできた。

「な、何？」

「見つけた。このさくらんぼの枝結びの使い方」

「は？ 何、姉さんもしかして大会か何かがあるって思ってるの？」

「そんなんじゃないわよ」

そういつや否^{いな}や、俺の視界はぐいっと急に反転した。

「優太。……私と、今晚一緒に寝よう。私の舌の威力を見せてあげるわ」

突然の姉の攻撃に耐え、亜衣が諦めて眠ってくれた頃には、時計はすでに午前3時を回っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3197z/>

姉は僕にキスをする。

2011年12月15日00時48分発行